

| | |
|------------------|---|
| Title | 経済学の自然科学的基礎 (上) (比較経済学序論) |
| Sub Title | |
| Author | 上原, 好咲 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1922 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.11 (1922. 11) ,p.1618(118)- 1624(124) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221101-0118 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

良も容易に得られよう。然らば吾々は國民の血が矢鱈に然も屢々必要もないのに流された昔の最も激しい戦争よりも更に盛に年々又機會の悪い時に色々の形で吾々の人口の多くを減少せしめる熱病や虎疫と云ふ敵を少なくする事が出来るであらう。」

Purdom 氏は此の計畫が充分に熟した事の證據を今までに見出し得ないとしてゐる。Ilford は今日に於いてはロンドン近傍の最も大きく且つ人口の最も多い都會地の一であるが若し千八百四十八年の提案が其の地を最初の Garden Village とする事に成功してゐたら今日の Ilford 地方の人口増加はそれ程望ましい事ではないであらう。(以上 Purdom, The Garden City. Chapter 1, The Villag Associations) (次號完結)

經濟學の自然科學的基礎 (上)

(比較經濟學序論)

上 原 好 咲

「私は經濟現象及其法則の領界に物理學的並に生物學的研究方法を適用することに依つて經濟學に從來より一層廣く一層科學的な根底を與へやうと企てた。そして此物理學的並に生物學的研究から更に進んで經濟學の基礎を社會心理學及文化人類學に検討した。此二重解釋即ち物理的且つ社會的解釋は、社會學を根本的に進歩させ夫れに一層正確な科學的妥當性を與へる唯一の正しい方法たるのであつて、社會學的科學の一つである經濟學も従つて同一の取扱を受けねばならぬ。然り余は生物學及心理學の社會學への適用上に於ける最近の進歩の光明に照らし

て經濟學を革新せんと計劃したのである。そして其の結果生産と分配、消費と價值、労働と人口の諸問題に關する經濟學上の新理論及新概念を得た。

「併し經濟學の此擴充及經濟學上の諸問題を一切の生物學的並に社會學的現象の科學的研究に適用されねばならぬ方法に依つて検討するといふ事は、余の此計劃に取つては一つの前提に過ぎないのであつて、乃ち余は此前提の上に立つて經濟學を更に廣い更に充分な見地から研究せんとするものである。其の廣く充分な研究とは其の内に、文化の程度乃至種類を異にする各郷土に於ける人種的並に國民的差別に關連する經濟制度の研究を含むものであつて、此研究は歴史的且つ比較的研究方法の必要にして多々益々一切の文化科學に適用されねばならぬものであることを教へる。そして斯くて始めて吾々は

比較經濟學なる新科學の基礎を確立し得るのであつて、此比較經濟學は其の姉妹科學である比較法律學、比較政治學、比較美學、乃至比較宗敎學と共に文化的分配の不公平な地帯を開發するであらう。蓋し經濟を含む社會的人間的進化的全體は、生物界の進化過程と同様に複雑差別多岐であつて、従つて吾々は人間の歴史、制度、環境、習慣等を夫々相異なる典型と形式とを特有する各差別的の地域に區劃せねばならぬ、そして其れ等と比較照合することに依つて初めて社會科學に普遍的原理を求め得るのである。

「乃ち茲に於て吾々は『郷土經濟學』換言すると經濟組織上相異なる典型並に楷梯の構造及作用に關する科學的研究、に遭逢する。吾々にして先づ歴史的且つ比較的研究方法に依り豫め標本的の經濟地域及形態から引出され且つ其れ特に適合する中間的公理及統一を設定して置かぬ限

り、『普通經濟學』の概念乃至、特殊の社會的經濟的郷土から引出される部分的經濟理論相互間の闘争を自ら調和せしむべき『普通經濟學』の法則を樹立することは出来ない、換言すると經濟學上の概念を物理學的・生物學的・心理學的乃至社會學的諸科學の原理に依つて供給される其の根原的の要素及因素に還元することは望まれないのである。」

右は戦時中バンデヤブ大學で『印度經濟學』の特別講座を持ち、其の後カルカッタ大學に轉じて其の Post-Graduate Department に經濟學を講じて居た印度人の經濟學者 Radhakamal Mukerjee 教授の近著『比較經濟學の原理』“Principles of Comparative Economics”の自序の一節である。

『比較經濟學の原理』は上下二卷に分れ、上卷は理論、下卷は事實の叙述主として印度の經濟基調を得んとするものであること前掲序文の略ぼ明示する處であるが、尙ほ此點を今少しく詳細に見ると、經濟學の原理は經濟的理想及政策の世界的變遷移動に鑑みて新たに改造されねばならぬが、其の改造は一つの準備階梯を必要とする。準備階梯とは今日人間の生命精神及社會に關する諸科學に適用されて大なる成功を収めて居る科學的方法に依つて經濟現象を研究するところである。從來の研究は經濟學の原理を、快樂主義の心理學と功利主義の倫理學との混血兒に作り上げた。併し今日の科學的分析及哲學的思想の一般的標的が、心理學上並に倫理學上の法則を物理學的及生物學的基礎に立つて解釋するにある以上、經濟學の原理も同様の立場から考究されねばならぬ。社會學的起原及進化に關する諸觀念の發達は、舊來の經濟學の範疇理論と兩立し得ぬものであつて、并は經濟學の理論的

的社會的事情の攻究的穿叢の詳細を極めた叙述に充てられて居るが、半面から見ると上卷は經濟學の原理論、下卷は所謂 Communalism の提唱と見られる。印度の經濟現象を歐羅巴の夫れと比較對照した結果其の概念を得たと言ひ、或宗教的信念に結び付けられて居る Communalism 説は Communalism が個人主義及社會主義に勝り、一切の經濟問題を解決するものであることを論じ、結論に於て神の出現を豫想して居る。『比較經濟學の原理』の中心論旨は寧ろ此コムミュナルズムの提唱にあると見ても可い位で甚だ興味あるものであるが、今は暫く措き、本稿は經濟學原理改造論の一部即ち經濟學の物理學的、生物學的、及心理學的研究を見るに止める。

偕て Mukerjee 教授は經濟學に物理學的及生物學的研究方法更に進んで心理學的社會學的方法を適用することに依つて先づ經濟學の改造の體系を生命現象及精神現象に適用されて居る進化論の概念に當て箴めて、他の社會的科學に於けると同様の科學的方法に依つて改鑄することを要求するものである。斯くて經濟學の原理は單に經濟學的方法である許りでなく、窮極に於てまた物理學的且つ生物學的となるであらう。併し這は未だ真理の全班を盡すものではない。則ち社會的進化の一部としての經濟的進化は有機的進化の無意識的本能的過程に、環境應化適者生存上の意識的新要素を賦與するが故、従つて經濟生活の物理的並に生物學的根柢は心理的社會學的 (Psycho-Sociological) 地盤に移植されねばならぬ。そして此地盤の上にも萬物進化の神髓である環境應化の原理が差別的環境に應へて、差別的の生活形態及經濟價值を創造し、且つ物質的並に精神的に相異なる社會的歴史的事態を生ずるのである。因つて今日の經濟原理は二重

の解釋に従ふ譯である。乃ち吾々は一面に於ては經濟原理を追求して其の根原及限界を物理學的及生物學的眞實に把むと同時に、他面に於ては是れ等物理學的並に生物學的基礎に發し、生命と歴史との統合に依つて相異なる社會的並に經濟的地域及圖境を支配する各種の社會的並に經濟的法則範疇乃至價值に達するのである。

以上が當面の根本觀念である。そこで先づ經濟原理の物理學的並に生物學的研究から始められる譯であるが、第一に生産の物理學的意義に就て Mukejee 教授はエネルギー説を採つて居る。乃ち生産とは之を物理學的に考へると「一定の過程に依るエネルギーの分離及其の一定の位置に於ける蓄積」であつて、其の間「エネルギーの總量には何等増減なく、唯潛勢力及運動勢力が人間の目的を満足させるに役立つやうに變化され再分配されるだけである。」是れだけの

生産された石炭石油瓦斯等が燃料として代表する潜在エネルギーは、其の生産といふ事實に依つて自然の蓄藏裡に在つた時より、機械のエネルギーとの關係上利用され易くなつて居るのである。同様に例へば農業上生産された食糧品の如きは人間のエネルギーに對し利用し易くされた潛勢力を代表する。器具機其他資本の同様の形態に就ても、燃料食物の場合と同様のエネルギー關係を見る。併し器具機等の代表する潜在エネルギーの形態は、比較的長期に亘る耐久性を有ち且つ數度の繼續的使用に分割され得るのであつて、食物燃料の代表するエネルギーとは生産財が消費財と區別されると同様に區別されるのである。斯く説く Mukejee 教授は食糧燃料を一種の生産財と見て居る。乃ち右に引續いて生産の第二種の場合を次の如く説いて居る。

事は必ずしも新しい説ではない。例へば日本の福田徳三博士も同様の説を採つて居る(國民經濟講話乾四三八頁)。併し福田博士が「富を生産すと申すは必竟人間の生活を進むるに足る資格を作り出すことで、約めて申せば價值を作り出す又は殖やすことの謂であります」と述べて、價值とエネルギーとの關係、換言すると價值の物理學的解釋に論及せず、主觀價值説に終始して居るに對し、Mukejee 教授は「エネルギーに依る價值の決定」にまで徹底して居る。

先づ教授は「生産の物理的意義」即ちエネルギーの變形が、種々異なつた形態に於て表はれることを謂ふて次の如き二種類の場合を説明して居る。

一つは蓄藏されて居る自然力が直接に運動勢力若くは潛勢力に變形される場合であつて、例へば石炭石油瓦斯等の生産の如きである。即ち以上の如き生産財の諸形態と別に、蓄藏されて居る自然力は消費財の製造に用ひられるが、其の場合に於ては前の場合の如く人間若くは機械のエネルギーの生産は直接の目的とされないのであつて、製造された物財に體得された効用が主たる目的なのである。併し此種の生産とては決してエネルギーに關係しないといふことはない、即ち次の如き二重の關係を有つ。第一に斯かる製造工業の生産も其れがエネルギーの變形行為であることは前記の採鑛又は農業上の生産と何等の差異がないと同時に、第二に効用そのものは一面に於てエネルギーを心理的產物に變形する作用を意味するものであつて、斯くて効用は生命的若くは心理的形態に於て量的に評價され、エネルギーの索引とされ得るのである。要するに孰れの種類の生産も物理學的意義に於てエネルギーの變形であつて、生産結果の大小は消費されたエネルギーに對する獲得された若くは利用し得るやうにされたエネルギーの剩

餘量又は超過量に依つて決定されるといふのが Muekerie 教授の説である。そこで科學の進歩と共に各種の形態のエネルギーは、相互に變形されるに於て愈々容易に愈々散逸漏費を少くするが故、生産過程及生産結果は産業の全分野を通じてエネルギー學の上に立つ基準となる。乃ち一定の生産物は變形されたエネルギーの一定量を代表する譯であるが、此エネルギーの一定量とは自然蓄藏の内から取得された若くは利用し得るやうにされた物質及エネルギーと、求むる變形を行ふに要せられた人間の勞働をも含むエネルギーの消費量との和である。そして此變形されたエネルギーと其れに結合されたエネルギーとの和が、生産物の含むエネルギーの量と等しいことは、潜在エネルギーの運動エネルギーへの變形及其の反對を意味する生産の凡ゆる場合に於て、力學上の方程式に依つて示される。併し生産物をエネルギーの量を以て評價し得ただけでは經濟學の目的は達せられない。經濟學の主題は價值である。

新刊紹介

マンチエスター
ガーディアンの
の歐洲改造雜誌

“Manchester Guardian Commercial”
Reconstruction in Europe.

歐洲今日の經濟社會が疲弊のどん底に沈んで居ることは、蔽ふ可からざる事實である。而して其原因は一般に歐洲戰爭に歸せられるが、戰爭の爲めに端を發した經濟的攪亂が今日に至るまで、尙ほ存續するに就ては、關係諸國民の無智であり、短慮であり、互に偏見を以つて、他に對して居ることの與つて力あるは、論を俟たない。宜しく諸國の國情を明にして、自他の理解を求めた上、歐洲の經濟を復興せしめる政策を確立することを必要とする云ふ考の下に、英國マンチエスター、ガーディアンの紙がジョン・メイナード・キーンズ氏を主筆として發行したものの、即ち表題に掲げた名稱の雜誌である。本年四

所が實際、力學上の方程式は未だ價值の方程式にはならない。而かも是れ等物理學的方程式の條件中に幾多の經濟現象の基礎を求め得るのである。則ち價值の點に就ても、エネルギーの同値及代替の原理は部分的に經濟價值の同値及代替現象の根底をなして居る。即ち他の事情の等しい限り財貨は夫々の生産に充てられたエネルギーの量が等しい時代替の原理に支配されて同一の經濟價值を有つ傾向を取るのである。以上はまだ價值とエネルギーとの關係に關する教授の説を盡したものでなく、又エネルギー關係が價值を決定する唯一のものではなく、唯一のものでないが故に尙ほ此物理學的の研究に加へて生物學的・心理學的乃至社會學的研究を必要として居るものであるが、要するに謂ふ處は價值論上吾々の第一に據るべき基礎は、正統經濟學派の採る如き慾望満足の同値及代替の理論、即ちエネルギーの同値及代替の理論の代用物ではなくて、エネルギー關係の理論其のものでなければならぬとするのである。

月二十日初號を發行し、七月末までに既に第五號を發行して居る。露西亞の經濟狀態とか、海運業の復活とか云ふような特殊の問題に對して、全誌を擧げて居ることもあるが、寧ろ是れは編輯法として、例外のものであつて、普通の場合に於ては、世間並みの雜誌と同じく、キーンズ氏の論說二三種、内外國人の責任ある寄書、諸外國通信ビジネス、バロメーター等を掲載して居る。現に七月二十七日發行の第五號の如き、歐洲の財政と關稅問題とを記事の二大項目とし、前者に就ては、英のキーンズ、アスキス、ウエップ、佛のカイヨ、伊のアイノーヂ、獨のシュローダー、ロツ、等の意見を後者に就ては、英のスタンプ、米のウキリス、獨のシューマツハー等の意見を収録し、最後に諸國の經濟的狀勢を示すに足る圖表と統計とが最も簡約された形式で巧に排列されて居る。

即ち本誌は國際經濟を評論し、紹介することを中心とする事業とするものであつて、特色は執筆者が堂々たる大家であり、記事が簡約されて居